



## 女性が当たり前にいる それがダイバーシティ

今年6月、一般社団法人・大阪府中小企業診断協会の女性初の理事長として、北口祐規子さん(66)が就任した。「先駆者のつもりはない。いつもやりたいと思ったことを正面に選ぶと、マイノリティーだったというだけ」。あっけらかんと笑う北口さんが、男性中心社会の中で模索しながら、自分らしく生きる道を切り拓いてきた。その姿が、次世代の女性をエンパワーしている。

一般社団法人  
大阪府中小企業診断協会 理事長 北口 祐規子さん

—企業の成長戦略策定や助言を行う中小企業診断士。経営コンサルタントとして唯一の国家資格で、近年人気を集めている。中小企業庁によると、有資格者は全国でおよそ2万7千人。ただ、そのうち女性は5%程度だという。千人以上が所属する大阪府中小企業診断協会の女性会員も100人に満たない。試験の合格率に男女差ではなく、女性の受験者自体が少ない傾向にある。

**北口さん：**会社員の場合、経営企画部など、経営の中核を担う人にとって役立つ資格です。あくまで推測ですが、女性の中小企業診断士の少なさは、社会全体で女性のキャリアアップがまだ思うように進んでいないのが要因の一つではないでしょうか。

中小企業診断士は、弁護士や税理士のような独占業務がなく、独立したとしてもすぐに仕事があるとは限りません。難易度に対し、割が合わないと考える人が多いかもしれません。でも、固定観念に捉われず、企業のよりよい未来に向けた提言ができるのがこの仕事のやりがいで

す。組織のトップに女性がいるかいないかで、印象は大きく変わります。私が理事長に就任したこと、自分も挑戦してみようと思う女性が現れるとうれしいですね。

—協会のほか、国の無料経営相談所「大阪府よろず支援拠点」でのチーフコーディネーターとしての業務や、女性中小企業診断士グループ「ビザの会」によるビジネスプランコンテスト開催など、活動は多岐にわたる。充実したいまの日々は、性差別と対峙した経験なしでは語れない。

**北口さん：**「女の子はお嫁さんに行けば幸せになれる」。なぜ女性に生まれただけでそう言われるのか。幼い頃から、周りの人たちの言葉に違和感を抱いていました。でも、コンピューターなら人を差別しないと思い、情報システムに興味を持ちました。高校の先生には「女子が理系に行くなんて」とと言われましたが、得意の数学を活かし、一浪して大阪大学基礎工学部に進学。ソフトウェア開発について学びました。

—1978年に大学を卒業後、大阪にあるソフトウェア開発会社にプログラマーとして就職。企業の販売管理や経理システムの構築を担当する。同僚だった夫と結婚し、入社4年目の26歳で長男を出産した。仕事は辞めるつもりはなかった。だが、男女雇用機会均等法や育児休業法も制定されていない時代、「ガラスの天井」に直面する。

**北口さん：**採用時、面接官に「ずっと仕事を続けます」と言いました。「そう長くいられても」と苦笑いされたことが引っ掛かったものの、仕事内容や初任給に男女差がなく、当時としては良い待遇でした。出産後は2か月で復帰。母に長男を預け、ブランクを埋めるために人一倍努力しました。でも、7年目、同期の男性社員が全員昇級したのに、女性社員は誰もできませんでした。仕事の成果で、男性に負けているなんて思ったことはなかったのに。ここにいても、単に属性で分けられ、個々の評価はされない。怒りと悔しさで頭がいっぱいになりました。

—1991年当時、女性としては大阪府で2人目の中小企業診断士だった。「男性に合わせるのではなく、女性の考え方や働き方も尊重しませんか」。男性の経営者が気付かない視点から、いまも助言を続ける。



大阪府よろず支援拠点での金融機関向けの研修会。  
経営相談での課題の引き出し方のノウハウを伝える。



「ビザの会」が起業家育成のために2005年から開くビジネスプランコンテスト。  
参加は性別を問わないが、暮らしに根ざしたユニークな視点を持つ女性の姿が目立つ。

—30歳で退職し、羽曳野市の自宅で長男の面倒を見ながら、フリーランスとして活動を始める。前職で付き合いのあった顧客からの信頼が厚く、仕事には困らなかった。

**北口さん：**あるメーカーの社員から「せっかくシステムを作ってもらったのに、社内でうまく活用できていない」と言われ、ハッとした。システム屋は企業経営を知らず、経営者はシステムを知りません。全体を把握し、企業の課題解決に導けば、自分もクライアントも納得できるのではないか。調べる中で行きついたのが、中小企業診断士の資格でした。試験を受け始めてから次男の出産も経て、36歳の時、3度目の挑戦で晴れて合格しました。

—1991年当時、女性としては大阪府で2人目の中小企業診断士だった。「男性に合わせるのではなく、女性の考え方や働き方も尊重しませんか」。男性の経営者が気付かない視点から、いまも助言を続ける。

**北口さん：**「女性の活用・活躍」という言葉が叫ばれて久しいですが、男性目線を感じます。性別や年齢、国籍を問わず、当たり前にそこに「いる」。それが、ダイバーシティではありませんか。女性を積極的に採用したいなら、まず女性用のトイレや更衣室といった職場環境の整備から。多様なアイデアが集まれば企業にとっても有益です。規模や業種によらず、企業を成長させる社長はそれをよくわかっています。

10年前に携わった、ある企業の業務改善プロジェクトでは、チーム唯一の女性が既存の社風に捉われない意見で議論を活発化させました。女性や若者は補佐役と捉えず、本人も周りも、チームの一員として与えられた役割を認識する。それが才能を開花させ、企業の変革を導きます。子育てをしながら、今もいきいきと



仕事以外の時間も充実。  
孫と過ごすひと時が何よりの宝物だ。

### I Profile

#### 北口 祐規子 さん

1954年生まれ、羽曳野市出身。ソフトウェア開発会社を退職後、1991年に中小企業診断士事務所「オフィス KITS」開業。2020年6月から現職。2019年度まで女性中小企業診断士グループ「ビザの会」代表を務めた。